吹雪の集

下

清々發句集秋之部

蜩抑まさるふ桐の葉の風ぞ

弦雲

蓋数ふ版ものとなりぬ女帝忌

七夕

かく嘆や松を書来る星一夜

森の耳そばだてゝ立る天川

むらさき花園の中 修学旅行あまの川

頭ゝ小京都と呼ぶ

此夕寿を世ましの祇園桃

うゑまいをのもとに一首の句乃川
薑(はじかみ)ちらせ橋も一筋の雨
作し金をかしの河原石
言陳舟中吟
きゝ吸人来作田の七月廿六
陸川下り歌
星ふるの夜水を汲くゝや船おろし
るなゝハ陸さ舟るへし星の橋
硯の世空打牛すゑ向の那
星二輝哭や川風海ゝうへ

物思ふやさよ千鳥哭星二人
おめ〳〵と星ふる書のちづくゝ哉
壬七夕の吟
鶏ハ青ゝ〳〵棚ゝ哭乃文
七月写赤去月也三ヶ木の雨ふゝ哭
探歌 水面星月
神月や夜ハ立哭星や 鶏山
題番椒
誉なゝ〳〵ふ昭哭ゝ哭ゝ哭この船
水面ふ移ひゝ風の言とゝゝ
番椒ゝる人も来鶏ゝ 鶏乃鶏

七月十六日

惜んで名残を尽くす　魂迎人

魂祭

来ぬ人を初見いつ迎ひ火　魂まつる

中元

孤五翁二茅六の日

ゐふと吾も親の舟寄の月　舟

魂棚や　秋は時雨の州　桂

風をさし　く馬と夕へのそ　光外

中元

刺鞋の塩干あとの神あ　茅

寛保二年七月十六日上京船中吟

六十九　秋名月　又月花

京を立つむ

京の秋を　を半と　い荒井　乃帆

七月十六夜暁門の前小船ひてゐ京所　とう寿

又宮　ゐく　ちく　ちく　月のそ　ちゐ

稲毒

いふ　ま　や　嵐乃　ゆ　ま　くるま　俗

稲毒ふ　ゆう　れ　毒　ま　本州　水

浮懐ふく　文年を暁を

いふつ乃の　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

久世三の句弾き

或　多賀　或い　冨士　三穂の浦

晴夜船中吟

又　康　月の海乃　和とけまろ

まゝ　芭蕉の書簡を写して

入江々　六たつ　つばらうれ

七月廿三日京所ちん日所る後の吟

亨　遠　雨　北　雲の名日門

探勝　山家琴

伯翼　乃　来　恋　萩　ちゝへん　坂乃月

日一字影　鯨

うゝ　ハ　を　月　清　乃　高　名　時　る　う　も

一と　秀　わ　て　て　奥　八　行　作　る　出　る　日

秋の悼　北斗　ハ　お　秋　そ　ろ　ず

朱　北　う　ゝ　ハ　雅　蓑　原　山　萩

松　百　合　秋　只　人　と　秋　て　ゝ　ま　ま　ま　ま　と

適　眠　と　影　風　な　く　多　竹　の　花

山　陰　乃　書　ハ　い　清　き　秋　蘭　の　宗

梨　の　蓑　高　秋　を　か　く　や　反　吟　方

鶏　高　秋　を　く　ゝ　る　や　井　林

鶏山家

小豆搗る家もまつるや麻の妻

蝸牛仏果をねかふぬかこの身

うれしさのまつに見るや　花鳥

蘭君一句を御所望橋下の御題送青梅とて

風蘭の下葉　字まん白山の事

八朔之吟

梅かゝや今朝吹かへは秋二月

さのく ぬ乃ことゝれハ枝のたわみとか

八月三日妙乃ち小竹氏大垣の乗物を築く
寿い秀徳なり読るか向へハ此の風情称んは
紛と雨く袖ぬれ猿うし

芝山のけふのさへ石称あれ玉かし　八

竹の節の亀之を送り給し
妙工ハ予帰の櫓ハかり

孫くみ此ぬ麻もまきらん節の中

越州君御姉君ゟ書

月もみる鶴の翠松おとこ山

題不

鶏頭を吹漂は明乃なりしか

武陽福居の友森覚ちもみ乃ありへ

吹く身ほとゝ見えや秋乃宿

享保元年山晴小換ふ

船川の玉れ緒ぞハむ尾花の露

半時庵を東披木トろ時文章ある夜小略れ

編うい如日とたゝやとも秋黄菊沢

日新文移ふ移りゆく所ハ

編うい如身とたゝやとも秋黄菊沢

右日と身の二字記もへし附と云文章も略之

述懐

秋ふも出ル雲ふを遠さ水城こゝふ

京洛ト居の表を負嶺ふして

柳子蒙乃かしらを見尾花ル

名ゝ

名月や涙もあるも涙さか

所の者や秋ゆくをうゝふ治利

名ゝや人ゝ先ゝ考ゝ月

病夜

お月かの近ロ乃雲と月見この事

或ハ時ふ雨ハ雲と

秋風ル佛一の國ゝ月見こう郎

香竹吟ふゝ四面清之秋

名ゝの積ゝ伏見や隠ゝつゝ

ふゝ雨ハ

月ル秋風降一ふ秋ふハなゝ者ゝ

一ゝ雲乃山源氏の図ふ移ル

死ふて明日ル月れ月れふひ

月十六夜ハ言記者ゝ湖上の象と
眺望まゝゝ文移のとあゝ名と云出出

名月や京を八月十六夜
之時一句

例あき之板乃名や橋の
森雨ときをれい

雨の門乃ち失婦の中れ月見こふ

橋小清光寺橋上小
徳出して京師の方とそふ

晴乃月之れ山を出乃ち

名月や森見ゝ乃ち赤ち
降るふもしきん晴るふ月見ふ称
ゝ青陽ゝ大乃ち立踏ゝ
右ゝ陽橋徐出

名ゝや俳ゝふ脇ハ物ち
馬て行 名もゝん月の華
日ふ桂里ゝ乃ち
名月や園の祇戒を悔ふ
新ふ山ゝ
晴ゝ青 神ハ編を抜れ月
雨ふ新ハ京ふを
俳月や頼ゝ月 霊生の光明寺
月
叶ふ新しハ秋月や見を

名月や海に出て夜の舟
月と酒と人間一人秋の夏
名月や池をめぐりて夜もすがら
和尚の庵にて
蛙なき寺は昼寝の
京津新地別業にて拙庵東山を眺に
又文字を以京物を別
船人いさらも月乃秋の山
夢に晋子云呉楚東南坼山更遠り
一句は一言ふまじ
彩を踏ふなしく踊る人月をまく

京都清水にて
三月の夜文書く例まれ
月夜はまれ
月夜にて彩雲橋を破る傘
美人眉の字を賜り多時
十六夜や桜小頻昇る山まる眉
梅ちるいい陽家まる婢の家
美紙に書る言葉
大圭の冊よ
高き杉人神まる柿
戸磨の蛙の身まる多時
家を社まく一反もまる世界の風

陸奥小野ふ止宿

陸中一戸ちゅうさうくを

宇治小野ひ陸ろさ

一日乃雪人をとゝ風の相

大津雪江戸陽小海ろくく京よりの別送れさるふ

陽乃やさゝふ衣の破れ相　雪江

禅林ひろ〳〵陸古家ろれ破草鞋のんもたろ

破草　こゝの旅も移ひ風ちる相

偶成

待〳〵待をうるめ乃神ちるこれ

享保十七子八月十九日大雨御車むつ〳〵れ来く

京極通を南の方く横ちるを相ミなる歌

月雨ち歌ち歌ち　笑うハ天乃なうゝふ

陸中清水

清明中孤なれ〳〵ちる乃ちる後

京宮附ちゝミ名れハ

盗人の涙なるゝん叶の家

小庵又六株悩むなるをちあ

新ちれ〳〵晴なと家乃〳〵ハ外

京原

花と見清〳〵傾株ゝと乃袴の袖

乃ゝゝ神乃家ゝ れま菓

京陽落字之哭

東ゝ鄙ふゝに東ゝとえを

皆哭ゝ家ゝ掛へ菓のやとゝふ

きくとゝふ女使もむ〳〵ふ

世界要素家を求菓子を求
人下 作 要ぬ むし〳〵の菓の類
放下
竿子 神田の駄や菓子屋
竿秋家函 和らもの
菓子屋日記くや墨丸清路〳〵 畑
関路五十の賀
七十乃 呂今 まち菓乃 氣
探訪頃の秋
春ふと似て 紙しめ菓子嵐か
朝ふタと来のを 来るを云くて日月逝ぬ
竹庵出風 ふから 生菓菓の花

探訪 寄菓玄
偷むふよ 花ふなりする 桃乃 呂
九月十三夜
言夜月ぬくて 三夜八 枝時なる 花八
おそ〳〵 八月 ふ 〳〵 新の月
久世の演 辛ぬく
東漢八 と れ 井 ぬ 後乃 月
来月 ふ 日 蓮 芙蓉 ふの
寒夜半時
子星 〳〵 巳 ひ ら 遠 後乃 月
十二夜八 月 清光
十六夜を 古 後の月
夜 ぬ ふ 日 ぬ 生 新 ふ 男 の 郎

十四日 嘆湖亭小松如
十三夜八夜の忠通作を

古人は去る一夜を秋去る月

九月小名伝と云ふ
てまちの廣田の祭りの日なり

名仙や十八日去る　うら去る夜を

菊青舎八日ゟ辺ゟ来る来る名月ゟ
月ゟ九月十日ゟ死と云事を先ニ刊

枝へ吹庵を風哀し　相一茶

又

穴かくや蚯蚓毎乃秋の風

芋秋

見て帰り庵の上なる古日月

来ぬ庵をしら川乃風乃名茶の松

百茶

陸のむとも庵を寄て宿の芋神名茶

李保氏秋日の吟　怪人集ニ入

入おの口風ゟ　如影をみちか

清く發句集冬之部

小春之部

春くるやゆく日の名殘冬ごもり

菜の花や月の林や藪の中

眞洞の藻衣亭小春小和冬の文章を略す

あいろをとかしてそれの時雨こゝ

多摩川の宿小和の窟小なれども冬ごもり

偶成

蓮ふね乃言をきゝつゝ風の聲

俳歩

寒く暮ぬらし家乃枯野かな

東山追悼老夫人逝る
十月果るよし

孫に縫し御衣ちゝとふ社の膝

述懐

宇宙たゞ心得手折ぬ木の葉かな

力なく花見る床の寒さの身

留主家にて

時雨

墻落の花見る宿や咲ぬかな

嫁里むかし床を包むや村しぐれ

いらふ家ん志ら紙の跡乃ちる柳

探府の然家を

陽春や留家ハ寂しき小夜しぐれ

老ぬく時雨を嫁むや夕日影

神しぐれまさし社の續かな

高津築店にて

曙さくハむかふ海の志ら帆とん

日の花を打つてハ暮はしぐれかな

一しぐれ毎川の月乃帆つけ船

晩や時雨のうちにれ河の向ふ

一しぐれ三河ゝ渡や　桔槔

一時雨過る春雨又月雨

右一句文字ふて翻訳まつてみをはこ

日影峯へ夜さへ夜乃時雨哉

右此句ハ先年「同の花をおもてハ夜にとや出と忍び出くる得の晴さる流をとさひあやうり又降しくされぬ風情やあらんと一句を記おしてひらをまつく

祇林近野寛守

ふやなうらん稀ぬり雷の神しるし

蓮上人にこ心

料てるや肩に獨のちり志賀里

明たる惜しんしやまの雪下出るまゝく

竹し久経陰よ飛鳥乃あとこの花

右先年宗祇日に「花のあまも音小明ぶなり

此句春の字と八隔句より昔の亀翁にと續てをを與與しし翁の字春字たり法の字多々用ひて作え風雅の法の字穏に於て名家多此句穏の字て名え大会泳ありたり米市の切と挿入のこま文まく住うると識語をそいふかく一葉にワかるり未知なり絶え識堂なくてハ及ふへし

高林君待別墅まて叩扉

来るくハ深夜りまり落ほしく経哉

江府小くや出家

雨小似くくいろさ雨文字一しく経

招齋之吟

汐悪るや生駒扉庫し山二時雨

水明大君 漕口切ふめさかく

さらてとてい明りし秋乃果世界

病夜

車おと明めい時雨ゆるまくく かな

探訪 俳聖道

枯蓮や紀ゝ戦よ一ゝくも

日宮恵ゝ

園の菱も対日を枯のきゝれゝ

芦うき嵐ゝゆゝむゝ多羅ず

腐ゝ柱乃枝ふ眠ふや小雨

病中吹岐咳

ゝゝゝゝゝゝ何を寄風上弟月

病後

芦の葉ふゝ傳る命や玉何ゝ孤

祇空先生の庵中乃芭蕉

孟考不枯刻むゝゝゝ破ゝを

芭蕉葉や ゝゝゝ梳ゝ孔ゝ髪

ゝゝ葉の葉ふゝ桐ゝ葉い枯くゝゝゝゝ

独学愚蒙書

ゝゝゝゝ田園まさゝ薫の郭

葉州重の候

花と形人ゝへ何て月よハ雲の候

玉泉禅師乗拂之時

風ゝゝ死ゝの枝ゝ死枯尾ゝ

祇空ハさゝゝの玉界史寺宗祇の墓ゝ

墓髪のゝ何ゝて祇空と改む宗祇の句ハ

ゝゝふゝゝ死の中ゝゝゝゝしいゝゝを

葉ハゝゝふゝるもさゝゝふゝ宗祇のやゝゝ能と

枝ゝゝ宗史の紙きハ近ゝゝ何ゝ者ふ枯ゝ時ハ

世ふるも文よまんを紙のやうなる
空の雲ゆく保ちさはりんめてうしそそりきはる

冬至

先師く十一日乃いとや彩市
親尺七寸日ふる

人手ふる翁且冬至　衣乃書

江戸雪く去暖を沼
小雨く降んすを

隆をまち沼るを松乃冬節

雪

初雪や紙を砂佛れ広くく

雪雪や波のそうあん岩のうえ

常盤さ人を神書　松杯

雪雪や霰と化る人ぬるうう

初雪雪理をそぐよう義浪る和

雪雪雪破ぬく書のひ孤外

人形寺乃ゆくや書乃書

五拍書紙墨を清ふるのゆ紙

元月の雪紀さ陸や味一の書

武陽市中

雪ふ清ふ古産ハきうう志ぬく外

探題 池雪

かつまきの曙ちかう方や雪ぞ積

杏門を詩ふ玄門を文を
夢くへんと又梅橋八景のなかと又

ゆく年をなほいとゞ別るる雪の唐

雪日孫歩

淀矢船いくたり立川の橋は雪

広橋白三大橋一望佳致

魚洗ふ舟の冨士や竹の雪

題唐肆 若字を咏

破小笠や人も嘶く雪嵐

独鶴禅院の一詩の
二字を当冠ふをく

[illegible]

題向境

新ふ魚ふ舟ふ松ふ人ふ八ふ景ふ一ふ六ふ社ふ

大主宗匠和ふ尤ふ也ふ文ふ字ふ暗ふ

ふ[illegible]なるの白ハ雪ふ月ふ乃ふ月

魚鱗板唐ふ移ふ[illegible]

龍の義之川の浦う[illegible]冬の[illegible]

八幡奉納
山上山下郡名二ツをこゝを

神ハ久世郡[illegible]繁[illegible]の[illegible]

立龍今ハと[illegible]しの時

稲妻や枝に画し富士の山
大坂　絲かく

水仙の禹王を栽よ夜明への事
日濃　尾山

霊も花散る華遣ん玉くら
見実追善　未年
我不十界見之諡名佛見と云ふ八

見形や御かくれ見え寒離や
近岡　大君かなる

威風ヒ面日も東ならぬ茂の松
大補　文章納

竹の日乃寒ふ嵐向田雲

短舟文くふるを関
漕ヒ見よ障子す月の川ふる

俳云八人京ノ真宝牡丹
いせ人八と云ひしハむかしの戯云なるへし

寒雨
晴る潜し樹を抱く墻も柏かな

夕立の暑をむくふや炭と云

水仙や黄ふ乞ぬ懐ろ手
影忠臣

一人別を喜ふ数やさよふる
至後

見よりは富士を出ると雲ふきて
富嶽を立て来る使ふ呂奥

力雄の色ふ一枝や　的の富
水

抱し蕊ふを風ふちる雪　水の花
富士つく暖日多し

織なす花ふ多しや　氷
年忘

伐捨ものや　水ありて乃ふ拾る
志情

富嶽の雪ふ笠　き俺森郷
主義

寒富士　重ふ冷入峰乃月

影沈て
瓢箪をとりふ　くふ見ぬかとき
暁情

いたくへ花　寒の月夜乃車牛
冬蚊

用ふいとくん　まゆく冷を
病蚊

月見るや　冷き　影りの乃物
寒芦枯

巧婦　芦ちる　花ふ　雪乃和
古和名たくを
亦名蘆虎

案者

鶯鳴乃稚き声も一段ず
（朧月八日ゑ）
冬の廿日や雪の衣きぬくゝ星
竜門社とゝの名所師を名所
小松も梅もうゝあ雪の波
卯月桃ゝを月乃ゝ年ゝ坂
笑ゝ迄恋やとゝの不動尊
只雪既ふゝゝゝ八間快雪の糸
ゝの尾や都の所ゝ孤鶴

行年や鶴ふ馬ゝ鶴の家
雷乃菜の陽も花ゝ家ふ
大河の河ゝ橋ふ新花の志乃ふ
（皆退侯の名）
新歳の実を二月緑も河を影
とゝくいふ人ゝ河を乃廬
梅提て来ゝ麻鶴人球蔵寒
一年を村ゝ乃ゝ緑の波
発句とゝを家や為ふ
能馬ゝ神ふや三百又十川

玄隣なる鶴ハ宮ゆく手の脚
和月ゆく九月やや寒空
海辛く湖まく少し苦也
踏折て枝ぬきの海をこゆ和
越次第 極る月まち忘の月
はの圍れうしもいと長の松
いう形ふ見て見ぬんや仏陀
接てる商を示ほや人時は
偶手伸く祝もをしの寫生

牛乾んく嵐を過ゆや大晦日
樅の玉見ぬさ人訪人をしの書
玄葉瓜さ稚ハ出へハをし一枝
塩鮭の汐を窟ゆ海をう邪
かんてんのうくてもノ手の書戸外
そても形り手を拓くや車過ひ
畫晦
此日ハ花計なる墨梁の枯まさ系

諸〻発句絵賛之部

牧馬一疋画けるに

飛や〳〵おもんハ渉る川縁枝千里路駒

山を画る者をうき雲と画まつとかきたる中
月の吹いと霞けさハさま老こゝろゆめぬもの
世かくんし後つゝまれきく
貯里寒なり作るありけるに

春かしや理の旅行家乃蟹

扇に梅とを画る画賛

又蔦の花さかり梅と孤山の夕霞

富士の山乃

自画賛

月を呑日をも春山写きの部

二十綱の本に情陰の逆さまに居らるに
打翻斜斗ーと云くまて

二尺時も打とり尽や浦の秋

茶菓の絵に付たるのこし　孫見に似たり

久しき世俗の秩のしらひ落

阿弥よりる栖狩のごとく紙かさる盃に諸と白と
とふに落ハ　宝の親　價なさまくいへとも一つさの
かくれる俗に何ままうめや

李白一斗

詩百篇花の風乃影かしけ

宋旦像之賛

楽天元真を喝て元白と云　原定今日一人乃
元伯なり雪花を友とし暖房に月を

菊乃秋待付清しおちまこゝろ

小園丸と同人ハ芦を名とし呉春丸とハ六兵と
みな手には何かハ分らしくそんさハ人々の自画賛

小猪が画の扉子立て霊を描ける

よし野のめも一夜書風乃雪

呉春　蕪村翁の賛

仲丸ハ京へ菜畑しめ花なる

彼此うる皆々文の出けるを画しに
莫耳と呼まけるを有せられも実

此君の墨髪涼し神素石

遊人を呼よ丸新のしく衣路

松竹の讃

此君ハ上ハ松まや下ハみどり

大仏を本西ゝる歟

夕暮乃家ふ花を待人　雲の去

布袋の背ふ雅さを画く
和尚玄奘を向ふる一様ゝ絵ふ

月到天心處地を氣ふなりゝ生乃松

片葉ふの芦れ絵ふ

波行末ふ蹟ゝ文字なりゝ多の絵

絶桃の絵ふ

家や対花ふ　玄都の絵ゝ事

松一樹ふ竹の画

幸崎や　伊勢の書風　稜作

瓢の器ふ名を付
山椒ゝ号ゝく

炭二人前ゝ　部屋や　駒ゝ家

薩摩中西氏侍の本ゝ舞ゝ恋の絵ゝ一ゝ
漆園ゝ先伝翻ゝ絵ゝ絵ゝ絵ゝ
禅家の法絵ゝ倒ゝふ仏ゝ中入ゝ門ゝ
企義の上ゝ長ゝ長ゝ長

寸松ゝ　雨ゝ　神乃さゝま　富士

石宮戸ゝ前ふ作俳優坂樹ゝ為賢愛蘭ゝ以手繼
ゝ松ゝて天照大神ゝ慰めゝ舞ゝ面の芸ゝく絵ふ
乳是刑部ふ神楽のまゝ招ゝ盤鶴ゝ
出人ゝ時もゝ

面白や　いろふ　花野　忠義ゝ花

五十而知天命　六十而耳順
七十ゝ迄ゝ欲ゝ所ゝ矩ゝ踰ゝ不
いろふも咲ゝ花ゝ
踏ゝ行ゝ　先ん　進ん　や　梅ゝ咲

赤深川の絵ふ
匡衡の家人赤深蓑の石位解皮の表文を
吾良人ふ表えうと云ハ此人を

人をてぬや年も茅蓑の秋の雨

蕉翁蓑夕の極りを思ひ付き給ふ所ハ

正よ此「蓑の」香橘——芭蕉の芽
日しを白のうんさく友有るてうり新葉ふ不友
月もおまく と年ゆく きを

稲を植ふ西うふ

森如ぐうす氏を紀ひやふ代根州

三教の画ふ

英酒て塗南——侵の神ふ蓑

梅の絵玉てさく玉ふ年ふ

沈ふや 旅ふ蓑ふ 一枚弾
日うく是好日

多南人ううや人ふハ屑ふ 松の風
李おや「蓑云」四の中の人ふハくをの松ふと
多を出ふ 松ふ日ふ絵しハ蓑法の世根こりう
月うく是好ふハふ中の絵りう

人九賛

都ふも かもふ山ふうう 眉の雪
蓑ふ徹の絵弾 英一操り画く
山気日夕佳なうと云既移亦已稚とうふも
ま天命とうるのたのうと

うへ徒うく者と還新年 蓑を玉那
蓑を玉と斗り船恒ハふ玉うう

浪華書林　丹波屋傳兵衛板

大森姓